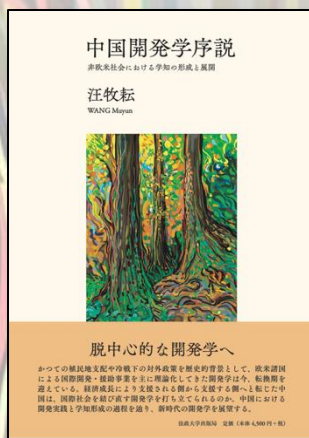


開発学はいかにあるか

—— 中国にみる非欧米社会の知的可能性 ——



汪 牧耘 (おう まきうん)

東京大学東アジア藝文書院

国際開発機構(FASID)

国際開発研究大来賞 記念講演 2025年1月15日 (水) 13:00-15:00



なぜ「開発学」(development studies)なのか

大来賞、そして開発研究との出会い

- 2017年11月5日、博士の進学相談、佐藤仁先生に打診。
- 第21回（2017年度）の大来賞、『野蛮から生存の開発論』受賞
- 2018年2月1日、大来賞記念講演：「開発研究の和製化」
- 修士の時代から続く、松本悟先生の伴走

「開発」を考える原点

- 中国貴州省威寧県・石門坎 (せきもんかん) 地域：宣教師の布教活動で有名になった少数民族地域
- 1930s-1970s：天災・人災。再び極度な貧困に陥る
- 1980s以降：学者、NGO、キリスト教信者、政府職員による異なる開発観と開発実践のせめぐあい
- 2010s：脱貧困の国家開発事業で、記憶・文化・歴史を観光資源に



1906年、宣教師のサムエル・ポラード(後・右1)
と石門坎のミャオ族 (出所：地元知識人の楊志武より)



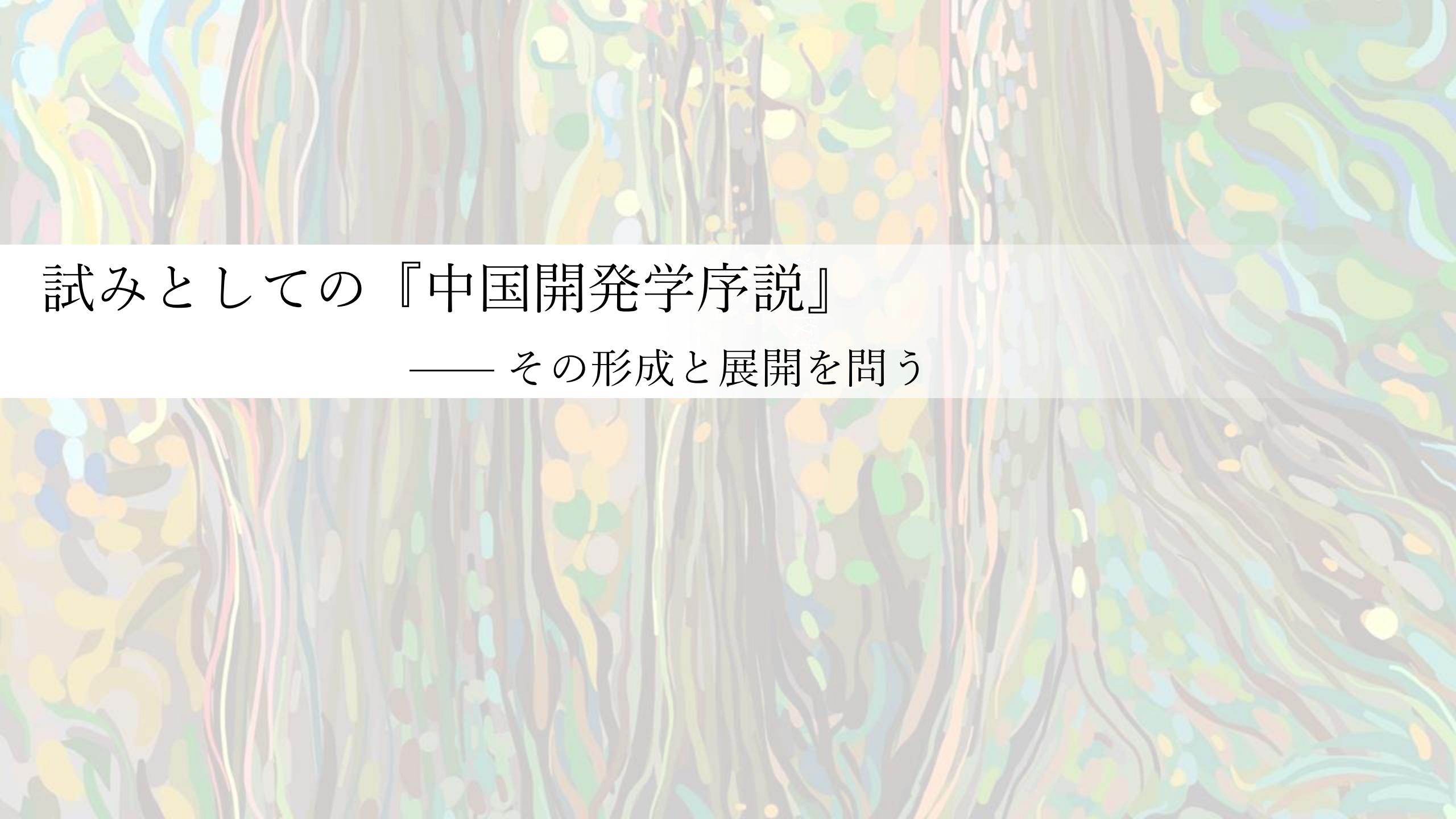
2016~2017年の石門坎
(出所：筆者撮影)



2016年8月 (左) と2017年2月 (右) の石門坎商店街
(出所：筆者撮影)



- 意図・結果ではかりきれない「開発」とはなにか
- 関心の変化：「開発」をめぐる言説のつくられ方



試みとしての『中国開発学序説』

—— その形成と展開を問う

問い

(詳細は序章、第1章)

➤ 開発学の「欧米中心主義」への批判と中国の動き

- 歴史・研究規範・使用言語・教育・発信の中心は「欧米社会」(Bilgen et.al. 2021, Ziai 2017, Rist 1997など)
- 2010年代以降、中国では国際開発関連の研究機関が相次いで設立
- 中国農業大学の研究者が中心に、新たな国家観や世界秩序を示す「**新開発学**」を構築する試み

➤ 中国の「**開発学**」という言説の系譜に着目

- 自国の国際開発を説明し正当化するために重要な役割を担う中国人研究者
- 約30年間にみる中国の開発学の「反逆」：
 - ◻ 今日：「西洋」に対する挑発、独自性の提示
 - ◻ 1990s：中国農業大学を基盤に、欧米諸国の開発理念や手法を中国に導入・普及

既存の開発学が「欧米中心主義」だと指摘されている中、中国の開発学はどのように形成・展開されてきたのか。

中国における開発学の設立経緯

(詳細は第5章、第6章)

➤ 1990年代末：「欧米発」の開発学の受け皿

- 教育・研究の復活、開発学の設立の言及 (例えば：肖 1990, 「第三世界開発学」(衛1997a; 衛 1997b))
- 「開発学」を中国に導入した研究者：李小雲 (りしょううん、Li Xiaoyun) 教授
 - ◻ 80年代末：旧西ドイツの対中援助事業に従事→ドイツやオランダで開発学を勉強
 - ◻ 90年代末：中国農業大学で中国初の「**開発学部**」を設立

➤ 2000年代半ば：自国経験の再評価と「欧米」への疑問

- 中国の国内外の環境変化
 - ◻ **高度経済成長**を遂げている中国に対する国際的な評価 (李 2018; 2019)
 - ◻ **海外進出**に対する国外の賛否両論
- 国内外の現場における開発実践から生まれた「欧米」への疑い
 - ◻ 「欧米中心」の**開発言説の虚構性**を指摘するポスト開発論や批判的開発研究の輸入 (葉 2016)
 - ◻ 「欧米的」な開発・援助理論への**違和感**の顕在化 (李ら 2017; 李 2019)

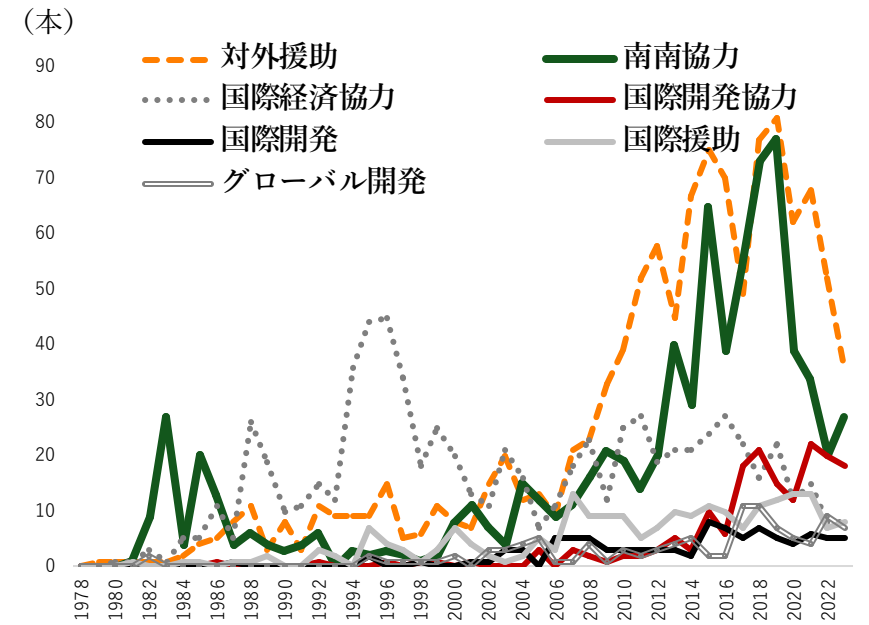
➤ 2010年代：国家戦略に伴う知識生産の組織化

- 中国の国際開発事業の規模拡大
 - 2018年：国務院直属・国家国際開発協力署（China International Development Cooperation Agency: CIDCA）の設立
 - 習近平国家主席：対外文化交流を拡大し、**国際的発言力**の向上 → 「中国の特色ある哲学・社会科学」の構築
- 国内の「開発研究ブーム」：研究・教育機関の林立

国際開発関連の研究・教育機関の設立（2010年代以降）

所属機関	研究・教育機関名	年
中国農業大学	国際開発研究センター	2012
	国際開発とグローバル農業学部	2020
清華大学	国際開発とグローバルガバナンス研究所	2012
商務部	国際開発協力研究所	2013
北京大学	南南協力と開発学部	2016
国務院	中国国際開発知識センター	2017
上海對外經貿大学	国際開発協力大学院	2018
對外經濟貿易大学	国際開発協力学部	2018

（出所：Cheng and Liu（2021）と中国学術論文データベース（CNKI）の検索結果をもとに筆者作成）



国際開発関連のキーワードごとの論文数の変化
（出所：CNKIの検索結果より筆者作成、2024/7/14最終アクセス）



中国国際開発知識センター（CIKD）

（出所：2023年8月筆者撮影） 8

中国の国際開発実践を特徴付ける場としての開発学

(詳細は第6章)

言説①：中国と西洋の開発をめぐる**理念の対立**は決定的である。

欧米の開発研究者は理念、価値観や計画性を重視する(=「**理念先行型**」)のに対して、中国はその場その場の状況に応じ、相手国のカウンターパートとやり取りしながら事業をつくり上げていくこと(=「**現場順応型**」)とのことである。(李ら 2017)

言説②：中国の実践は**対等性**を重視する「**平行経験**」の共有が特徴である。

第1に、中国国内の開発経験が**ありのまま**共有されており、その経験は特定の文脈に依存しており、実用志向と非理論化が特徴である。第2に、経験伝達の媒体は、それぞれの領域の**中国人専門家・技術者**である。彼らは国際協力専門の組織や機関に属していないため、より柔軟に相手国と交渉し、進め方を随時に調整することができる。第3に、中国と相手国の関係は発展を遂げるための利益共同体であり、それによって**対等的な経験共有**ができることである。(徐・李 2020)

※ 関連する主張：周 (2020)、Tang (2021a, 2021b)など

「東アジアにおける貧困削減の模範的技術援助プロジェクト（ラオス）」

（詳細は第9章）

- 中国政府による初の国外における貧困削減援助事業（章 2018）

期間： 2017年9月～2020年9月（3年間）（※コロナの影響で延期）
資金： 中国商務部の対外援助司から；総額1億人民元（約15.2億円）
対象国： ラオス（→[広西チワン族自治区](#)）、ミャンマー（→[雲南省](#)）、カンボジア（→[四川省](#)）
援助者： 中国政府（公務員）
目標： 中国国内の政策経験の共有による村レベルの生活改善
政策経験： 「整村推進」政策（2001～2011）
科学技術・教育・文化と衛生事業等の総合的開発
方式： 「政府主導＋住民参加」
事業内容： (1)インフラ整備、(2)公共サービス、(3)農民の生計改善、
(4)キャパシティの向上、(5)技術援助



（出所：筆者作成）

「対等・平行」の言説が中国の国際開発を説明する際の「常套句」になるにつれ、開発援助における非対称的な関係性や、従事者が自らの現場体験の複雑さを真摯に受け止める機会を失う恐れがある。



中国と日本のすれ違い・絡まり合い

—— 遍在する悩みと傾向の気付き

➤ 戦後日本の国際開発研究関連の人材育成・研究・組織

1958年 「アジア経済研究所」

1966年 日本拓殖学会（1991年に「日本国際地域開発学会」へと名称を変更）

1967年 業界の雑誌「国際開発ジャーナル」社の創設

1971年 総合性シンクタンク・国際開発センター（IDCJ）

1974年 日本国内外の人材ネットワーク：国際開発研究者協会（SRID）

1975-1982 国連大学「技術の移転・変容・開発－日本の経験プロジェクト」

1990年 国際開発学会の創設（JASID）

1993年 海外経済協力基金（OECD）・開発援助研究所の創設

2008年 国際協力機構（JICA）・JICA研究所の創設（→JICA緒方貞子平和開発研究所）

➤ 日本の国際開発：「非体系化」の研究と教育

拓植系大学

- 拓殖大学
- 東京農業大学
- 日本大学
- 宇都宮大学

(北野 2017)

1980年代：対外援助の規模拡大→人材育成の問題（“一人当たりの担当援助量”）

1983年 新潟県・国際大学

1985年 外務省内部の勉強会の中、「国際開発大学構想」を提出（実現せず）

↓
1990年 国際開発高等教育機構の創設（FASID）

1990年初頭 「国際開発学御三家」（名古屋大学・神戸大学・広島大学）

1990年 「旧アジア経済研究所開発学校」（IDEAS）の開設

1991年 政策大学大学院（GRIPS）「国際開発プログラム」の開設

- 開発学を学問として深めることよりも、日本の海外進出にともなって育成された実務者を回収しながら、新しい実務者を生み出すことが主な目的（潮木 2013）。
- 学部教育への拡大。開発学を「多様な学問分野・多様な仕組み・多様なアクター」から総合的に紹介する傾向が新しい潮流（例えば、大森・西村編 2022）。
- 一方、国を挙げて開発学を作る取り組みのなさ（大野 2011:81）

外的批判による関係性の捨象

(詳細は第9章)

言説③：非欧米同士の日本は**独自の開発知識**を生み出せなかった。

日本は、西洋諸国との競争の中で、自分の開発援助分野の特徴を保つことができなくなり、さらに西洋の言説に近づこうとしている結果、「自助努力」やインフラ重視の方針から、安全、環境、貧困削減などといった込みいったリストに取り組みることとなった。(徐・徐 2020:118)

➤ 日本における試行錯誤：

- 近年の「開発学」関連の検討 (例えば、北野 2017、北岡 2022、大山 2024、Sato and Kim (eds.)2024)
- 戦後の国際関係：戦後の日本知識人による戦争への反省、国家・民族特色の積極的な宣伝を警戒。日本的な理念よりも、ほかのアジア諸国に受け入れてもらうこと (渡辺 1973)
- 「独自性の主張」への違和感：他国にも存在する「自立・自助努力」の系譜 (下村 2020)
- 「現場主義」・**実践知** (phronesis) を重視 (佐藤 2016)：日本は相手国の事情に合わせて提言。協調的・体系的な見解 (**知識**) よりも文脈依存の (**経験**) (Sawamura 2002: 346,)

日本と中国の開発学：

- 単純化された「欧米像」、それとの差異化による自己特徴化
- 提案：日中の「開発・発展」の概念史をはじめとする関係性の可視化 (詳細は第4章)
- 「開発知の森」の地下世界を潜る



可能性としての非欧米社会の開発学

——「属人性」「混合性」を軸足に

本書を振り返って

➤ 及ばなかったところ

- 「大きな物語」「中間的物語」「小さな物語」の（非）連続性を、より長い時間軸で、動的に掴めること
- 「脱植民地主義」をはじめとするほかの議論の系譜における研究蓄積との対話

➤ 「『開発学』は学問分野なのか？」という定番質問へ

- 開発学の標本づくりではなく、社会現象としての開発学づくりに着目
- 国際開発の後発国が自らと世界の関係を紡ぐ場としての開発学の可能性
- 研究者の（被）開発経験と開発学の連動

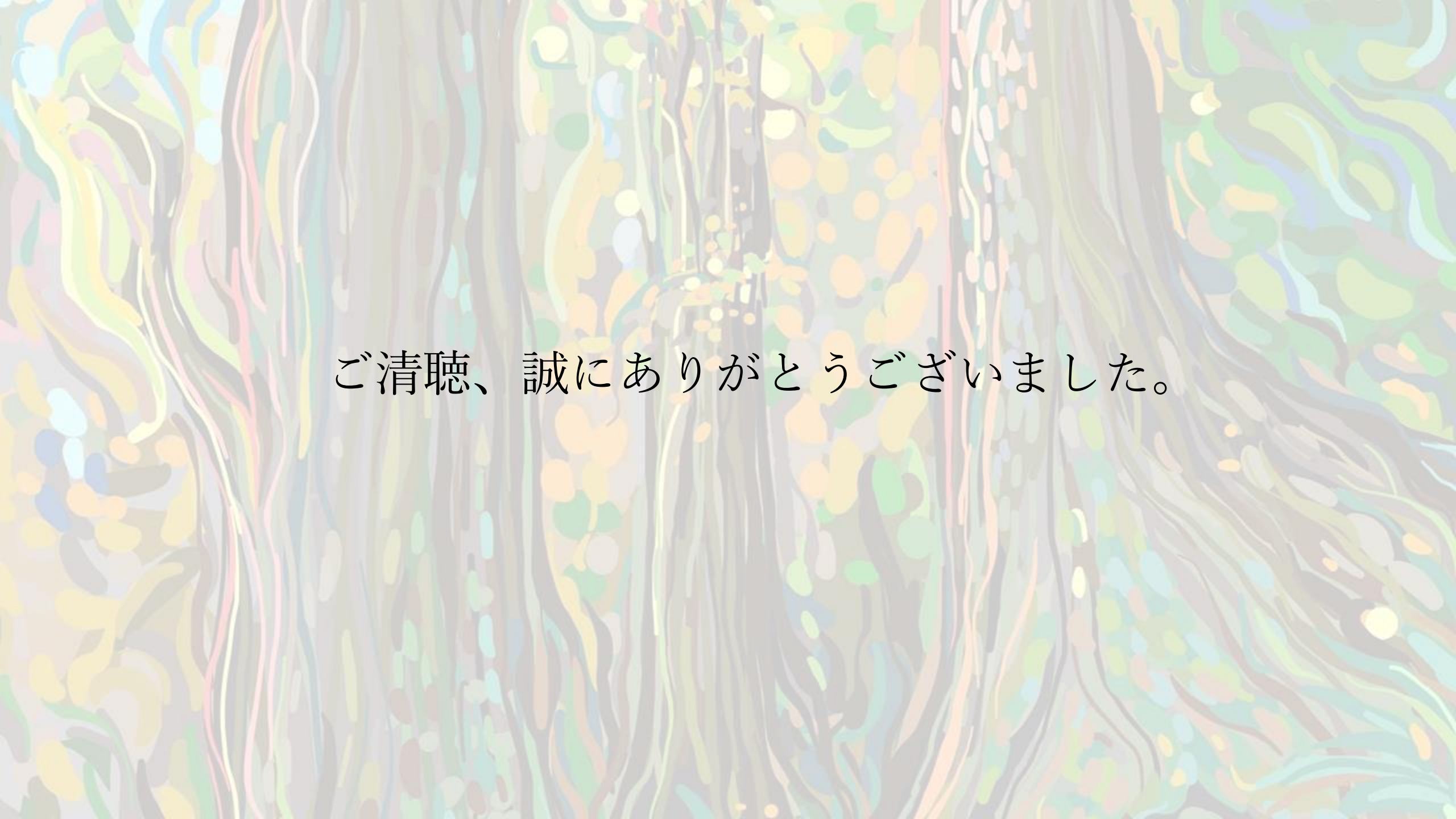
「混合的な経験」を丁寧に生きるための開発学

➤ 開発学への問い、自分への問い、そして問う場としての日本

- 「後進」による焦燥感からの離脱
- 「ありのまま」を受け入れる・受け入れられる経験
- 「属人性」を軸足とする再帰的な開発学

➤ 非欧米社会に投げ込まれている混合性

- 「受け入れ側」ならでの「混合的な経験」、「自己中心化」から「複数の中心」へ
- 多様な開発学のあり方：フランス語圏、スペイン語圏、アジアの「周辺」のなかの中心の歴史、開発学を求めるアフリカの動き（例えば、Baud et al.(eds.) 2018、Muzorewa 2024、呉 1981）
- 「より良い生」をめぐる信念・解釈・実践への理解



ご清聴、誠にありがとうございました。

主な参考文献

<中国語>

- 李小雲、2018、「扶貧能讓人致富嗎?」、『中国鄉村發現』第6卷、42-45頁。
- 李小雲、2019、『發展援助の未来：西方模式的困境和中国的新角色』、中信出版社。
- 李小雲・馬浩文・唐麗霞・徐秀麗、2016、「關於中国減貧經驗國際化的討論」、『中国農業大學學報（社会科学版）』第33卷、第5号、18-29頁。
- 李小雲・徐秀麗・齊顧波、2015、「反思發展研究:歷史淵源、理論流派与國際前沿」、『經濟評論』、第1号、152-160頁。
- 李小雲・張悦・刘文勇、2017、「知識和技術的嵌入与遭遇:中国援助實踐敘事」、『西南民族大學學報（人文社科版）』第38卷、第11号、1-8頁。
- 李小雲、2017、「發展知識体系的演化：从『懸置性』到『在場性』」、『人民論壇·學術前沿』第24号、86-94頁。
- 孫兆霞・毛剛強等、2014、『第四只眼——世界銀行貸款貴州省文化与自然遺產保護和發展項目（中期）「社區参与工作」評估及重點社區基線調查』、社会科学文献出版社。
- 李小雲、2017、「中国援非的歷史經驗与微觀實踐」、『文化縱橫』第2号、88-96頁。
- 徐加・徐秀麗、2020、「被架空的援助領導者：日本戰後國際援助的興与衰」、『文化縱橫』第6卷、115-123頁。
- 徐秀麗・李小雲、2020、「發展知識:全球秩序形成与重塑中的隱形線索」、『文化縱橫』第1卷、94-103頁。
- 徐秀麗、2022、「從受援者到援助者的知識自覚」『区域』（第9輯）。
- 衛建林、1997a、「東西南北和第三世界發展理論（上）」、『高校理論戰線』第8号、38-45頁。
- 衛建林、1997b、「東西南北和第三世界發展理論（下）」、『高校理論戰線』第9号、27-36頁。
- 葉敬忠、2015、『發展的故事:幻象的形成与破滅』、社会科学文献出版社。
- 吳相湘、1981、『晏陽初傳:為全球鄉村改造奮鬥六十年』、時報文化出版事業有限公司。
- 周太東、2020、「關於分享中国發展知識的思考」<http://www.cikd.org/chinese/TalksDetail?docid=1647>。(2024/12/31最終閱覽)

<日本語>

- 大来佐武郎（1991）「特別寄稿」『國際開發研究』第1卷、第1号、i - iv 頁。
- 大野泉（2011）「第6章 途上国開發をとりまく戦略的環境と日本の開發協力——グローバル・シビリアン・パワーをめざして」『将来の國際情勢と日本の外交』日本國際問題研究所、71-87頁。
- 大森佐和・西村幹子編（2022）『よくわかる開發学』ミネルヴァ書房。
- 大山貴稔（2024）「「日本の開發学」をめぐる政治的風景：北岡伸一JICA理事長による近代化論の復権」『東洋文化』104、203-226頁。
- 北岡伸一（2022）「「日本の開發学」の構築へ——JICAチェアは100か国展開を目指す」『國際開發ジャーナル』第783号、32-38頁。
- 北野収（2017）『國際協力の誕生——開發の脱政治化を超えて改訂版』創成社。
- 佐藤仁（2016）『野蛮から生存の開發論——越境する援助のデザイン』ミネルヴァ書房。
- 下村恭民（2020）『日本型開發協力の形成 -政策史1・1980年代まで』東京大学出版会。
- 廣野美和編（2021）『一帯一路は何をもたらしたのか：中国問題と投資のジレンマ』勁草書房。
- 武者小路公秀・鶴見和子（2002）『複数の東洋／複数の西洋——世界の知を結ぶ 鶴見和子・対話まんだら 武者小路公秀の巻《知》』藤原書店。
- 元田結花（2010）「IDSにおける開發觀の形成：植民地經營から國際的課題としての開發へ」遠藤乾編『グローバル・ガバナンスの歴史と思想』有斐閣、163-190頁。

<英語>

- Bilgen, A., Aftab, N., & Schöneberg, J. (2021). "Why Positionalities Matter: Reflections on Power, Hierarchy, and Knowledges in 'Development' Research." *Canadian Journal of Development Studies*, 42(4), 519-536.
- Chakrabarty, D.. (2000). *Provincializing Europe: Postcolonial Thought and Historical Difference*. Princeton University Press.
- Cheng, H., & Liu, W. (2021). ."Disciplinary Geopolitics and the Rise of International Development Studies in China" *Political Geography*, 89, 102452.
- Cheng, H. (2020). *Landscape of Ideas: The Rise of Chinese International Development Thinking* [Ph.D. thesis]. University of Cambridge.
- Escobar, A. (1995). *Encountering Development: The Making and Unmaking of the Third World*. Princeton University Press.
- Esteva, G. (1992). "Development." In Wolfgang Sachs (ed.), *The Development Dictionary: A Guide to Knowledge as Power*, 6-25. Zed Books.
- Li, X., Banik, D., Tang, L. and Wu, J. (2014). "Difference or Indifference: China's Development Assistance Unpacked." *IDS Bulletin*. 45(4), 22–35.
- Muzorewa, T. T., Sillah, R., & Chibanda, T. W. (2024). The Efficacy of the Development Studies Programme in Zimbabwe's Development Work. *Africa Review*, 1(aop), 1-20.
- Rist, G. (1997). *The History of Development: From Western Origins to Global Faith*. Zed Books.
- Sato, J, & Kim, S. (eds.). (2024). *The Semantics of Development in Asia: Exploring 'Untranslatable' Ideas Through Japan*. Springer Nature Singapore.
- Sawamura, N. (2002). "Local Spirit, Global Knowledge: a Japanese Approach to Knowledge Development in International Cooperation." *Compare: A Journal of Comparative and International Education*, 32(3), 339-348.
- Sumner, A. (2024). "Unity in Diversity? Reflections on Development Studies in the Mid-2020s." *The European Journal of Development Research*, 1-19.
- Tang, X. (2021a). *Coevolutionary Pragmatism: Approaches and Impacts of China-Africa Economic Cooperation*. Cambridge University Press.
- Tang, X. (2021b). Co-evolutionary Pragmatism: Re-examine 'China Model' and Its Impact on Developing Countries. In *China's Big Power Ambition under Xi Jinping*, Routledge, 50-67.
- The World Bank. (2017). "Implementation Completion and Results Report on a Loan in the Amount of US\$ 60 Million to the People's Republic of China for the CN-GuiZhou Cultural and Natural Heritage Protection and Development."
- Ziai, A. (2016). *Development Discourse and Global History. From Colonialism to the Sustainable Development Goals*. Routledge.
- Ziai, A. (2017). "'I am not a Post-Developmentalist, but...!' The influence of Post-Development on development studies." *Third World Quarterly*, 38(12), 2719-2734.

參考資料

第1章 研究背景：開発言説の研究の系譜と本書の分析枠組み

第2章 先行研究：中国の開発学に影響を与える要素の解明と残された3つの課題

- 課題1 「開発学」という名に、どのような中国語の開発概念の歴史的背景があるか。
- 課題2 1990年代から、中国の開発学の創設に携わってきた中国農業大学の研究者はどのような経歴の持ち主で、どのように開発学をつくらうとしてきたのか。
- 課題3 それらの研究者が生み出した諸言説は、何を、どのように取捨選択したのか。

第3章 調査対象・手法：課題に取り組むための調査に関する説明



調査結果

第II部：分野の形成（課題1,2）

第4章 「開発学」という名
第5章 開発学の創設者
第6章 開発学の教育・研究

3つの言説の抽出

第III部：言説の形成（課題3）

第7章 西洋との相違・対立
第8章 「対等性」という自画像
第9章 日本への批判



終章 結論：中国の開発学の形成・展開とその可能性